栞集を読む

松岡　隆子

檻の鷲見えざるものに身構へる　植田喜代子

檻の鷲を詠んだ句に、虚子の〈大空をたゞ見てをりぬ檻の鷲〉があり、波郷の〈檻の鷲さびしくなれば羽搏つかも〉がある。飛翔力とその勇姿から鳥の王者とされる鷲も長く檻に飼いならされれば斯くあらんと哀れを誘われる。だが、植田さんが見た檻の鷲は威風堂々としていた。眼光鋭く一点をみつめ、きっと身構えた姿は王者に相応しい。見えざるものに身構えるのは、大自然の中に生きるモノの宿命とも言えよう。

風邪ぐすり妻の残りを貰ひけり　梶浦　道成

少し鼻水が出て寒気がする。喉も痛い。風邪を引いたようだがまだ医者にかかるほどでもなさそうだ。「私の風邪薬の残りがあるから呑んでおいたら」と妻が言う。何処にでもある日常生活の一齣だ。〈貰ひけり〉の人情の機微が事柄を俳句にしている。〈呑みにけり〉では報告に過ぎない。先生に〈迷惑をかけまいと呑む風邪ぐすり〉がある。眸先生の謦咳に接する機会のなかった梶浦さんだが、先生の身辺詠をよく学んでいる。

雨男ゐてこの旅も時雨るるや　椎名佐和子

天気予報は晴れのはずだったのに、急に空模様があやしくなった。「君が一緒だといつも雨なんだから」と仲間の視線が集中する。雨男、雨女などと呼ばれるのは当人にとっては不本意なことだ。何もその人のせいではないのだから本気で咎めているわけではなかろう。軽く揶揄しながら、仲間同士時雨の旅を愉しむのである。俳句仲間ならなおのこと、時雨もまた一興、ということになろう。

因みに眸師が一緒だといつも晴れた。「朝」の辞書には「眸晴れ」という言葉があった。

初氷踏めば降りくる真夜の星　堀　真智子

初氷というと先生の〈初氷夜も青空の衰へず〉が口を衝いて出る。真冬の夜の寒気につつまれて、初氷も夜空の青さも凛々と鳴るようだ。掲句は、先生の句に通じる抒情がある。戯れに踏んだ初氷の欠片がきらりと光る。満天の星のきらめきが零れ落ちたかのようだ。初氷を踏んだことで、堀さん自身の句になった。

夫死後の明け暮れ長き大根引く　矢作　裕子

ご夫君の急逝からそろそろ一年になろうか、一年という歳月は時に一瞬にも思えるが、場合によっては二年にも三年にも思えよう。さっきまで言葉を交わした人が突然目の前から消えるという非情な現実は受け入れ難いことだ。遺された畑